



「日本語は難しい」～ 漢字学習のスタート「数詞」～

子どもにとっての日本語の難しさ(習得する上でのつまづき)として、今回は「漢字」を取り上げます。

■漢字の数の多さ→無限? 常用漢字が対象 小学校では1,006文字、中学校までは2,136文字の大体

漢字の習得の難しさといえば、まず出るのはその数の多さでしょう。かつては『大漢和辞典』に収録されていた約5万字が漢字の総数とされていたようですが、今はその数倍、否、無限という数(?)までいわれています。学校教育で対象となるのは常用漢字の2,136文字です。中学校まではその大体を学習します。小学校ではその内の1,006文字を学習します。これは約200日間の授業日がある日本国内の小中学校でのことです。当補習授業校の授業日は、年間に実質39日間です。数だけを見れば、授業日数から計算して、毎授業日ごとに小学部で4文字以上、中学部で9文字以上の新しい漢字を習得しなければならないこととなります。

■漢字学習の3目標→「読める」「使える(使い慣れる)」「漢字の構成や由来、特質などについて理解する」

漢字学習の目標は3つあります。小学校では、1つは「読めること」2つめは「文や文章の中で使える(書ける)こと」3つめは「へんやつくりなどの構成や由来、特質などについて理解すること」(第3学年以上)です。中学校では、小学校のものを引き継ぎますが、第3学年では、小学校の2つめの目標が「文や文章の中で使い慣れること」となっています(現行『学習指導要領』)。注意したいのは、単に「書ける」ではなく、実際に「使える(使い慣れる)」とされていることです。

これら2つを前提として、漢字の難しさを考えてみます。今回は、紙幅の都合上、指導のスタート(導入)である「数詞」だけを取り上げます。

■日本語の「数詞」の複雑さ→覚えるしか・・・

意外に思われるかもしれませんが、小学校1年生の教科書『上』で学習する漢字は、一から十までの十文字だけです。もっとも画数が少なく、身近で簡単な文字で

あり、「とめ」「はね」「はらい」等、書く上での基本を分かりやすく学ぶことができるよう配慮されています。一方で、この単元で学ぶねらいは漢字で書くだけではなく、「数詞」としての漢字を学ぶことにもあります。すなわち、「一」は「イチ」であり、一つ手をたたく場合は「ヒト(つ)」と表し、また、子豚を数えると一匹のように「イツ(びき)」と3種類の表し方を学習します。また、「一」には「ヒー、フー、ミー」のように、「ヒー」と発音することもあります。このような特徴は、以前取り上げた英語の「I」が「私」や「吾輩」などと複数の言い方になるのと似ています。しかも、数え方は、対象により「一匹」「一台」「一本」「一杯」などと決まって使用されます。付随していえば、「一匹(イツびき)」は、その数が増えると「ニひき」、「三びき」と「匹」の表し方が変化します。このような複雑さに、一定の決まりはなさそうです。覚えるしかありません。

このように、漢字の学び始めは、書くのには簡単でも、複数の表し方のある「数詞」からです。もっとも、学習の導入ですから、数詞を「数え歌」ふうにして、楽しく歌いながら身に付けられるよう工夫されています。

(気になるので、先に言い訳をしておきますが、漢字の数詞を扱いながら、上には数字交じりで表した部分があります。分かりやすさを優先したためです。このような事案もスペースがあれば取り上げるつもりです。)



〈ある日の授業から〉